

女性たちはミニコミの中で何を語ってきたのか

—タイトルのテキストマイニングを通して—

樋熊 亜衣

本稿は 1950 年から 2009 年までに女性団体により発行されたミニコミ (127 誌) のテキストマイニングを行ない、彼女たちの話題の変遷を明らかにした。ミニコミとはオルタナティブ・メディアの一つであり、フェミニズムの発展には欠かすことのできない存在である。女性たちはこれまで、ミニコミという紙面のうででコミュニケーションを図ってきた。そこで女性たちは何について語ってきたのだろうか、これを明らかにすることが本稿の目的である。筆者はまず、ミニコミの記事のタイトルに用いられた語上位 30 位を抽出した。ここで注目したのは、①呼称の変化 (婦人, 女, 女性)、②時代を反映した語 (例えば優生保護や家庭科など) である。またある時期に現れ、その後継続して使用され続けている語 (差別, 性, 人権, 暴力) についても説明した。最後に、新しい問題として「差別」と「性」の語について、それぞれの共起する語を抽出した。「差別」は、「条約」「男女」「性」「賃金」「雇用」「婚外子」といった語と共起が多くみられた。また「性」と共起する語は「差別」から「暴力」へ移行しており、「性」を語るうでで「暴力」という概念が重要な役割を果たしていたと主張した。

キーワード: オルタナティブ・メディア, ミニコミ, テキストマイニング

1 はじめに

本稿は、1950 年から 2009 年までに女性団体によって発行されたミニコミの記事のタイトルのテキストマイニングから、女性たちがミニコミの中で

のような話題について語ってきたのか、その変遷を明らかにするものである。

第二波フェミニズムの流れのなかで、「語る」という行為は大変重要な意味をもってきた。「自分の感情や思想を表現する機会も意欲も奪われがちであった女性たちが、自分の言葉で、自分の信条や意見を表現し始めた」（井上ほか 2006 : 134-5）のが 1970 年ごろ、つまりウーマン・リブの時代であった。千田有紀は、「言葉を紡ぎ出していくこと、そのこと自体が解放の言葉を紡ぎ上げていくことであり、解放の過程だった」（千田 2010 : 133-4）と、「語る」ことは女性の解放にとって重要なものであったと評価している。だがこの「語る」という行為は、「言葉を紡ぐ」という字義通り、「話す」という行為に限定されるものではない。例えば、木村涼子は、「話す」ことだけでなく、識字運動などの「『書く』行為を重視した取り組み」の意義について言及している（木村 2000 : 38）。また清原悠は、「書くこと・読むこと・話すこと」（清原 2014 : 97）が循環関係にあることを、ある女性団体の機関誌の投書を分析することで示している。清原の分析から、機関誌の書き手と読者の関係は、書くだけ/読むだけという固定した一方的な関係ではなく、書き手＝読者であり、その誌上で（さらには誌上を超えて対面で）コミュニケーションを行うような関係であったことがわかる。つまり、女性たちは機関誌という場で、「書く」という手法を用いて語り合ってきたのである。

こうした「語り場」である団体誌は、これまで数え切れないほど発行されてきた。その特徴は、時代・団体によってさまざまであり、女性団体を紹介する『わたしの便利帳』という本をみても、多くの団体が定期的に団体誌を発行してきたことが分かる。インターネットや SNS 等の電子媒体が普及した現在でも、団体誌を発行し続けている団体は多い。

この数多ある語り場において、これまで女性たちはどのようなことを語ってきたのだろうか。フェミニズムの歴史を振り返る際、例えば、ウーマン・リブ以降「性」を取り上げるようになったことなどが言及されるが、その取り上げ方は変化したのか、したのであればどんな変化か。また他の問題への関心はどうであったのかなど、それぞれの関心の推移は判然としない。団体誌のなかで何について語られてきたのか、その動向を明らかにすることで、女性たちの関心の歴史を概観することができるのではないだろうか。

そこで本稿では、団体誌の記事のタイトルに用いられてきた語の頻出度を明らかにし、彼女たちの関心の動向を明らかにしたい。本稿の構成は以下のとおりである。まず2節では、こうした団体誌（＝ミニコミ）がどのような性格をもつメディアであるのか、それを研究することの意義とは何かを「オルタナティブ・メディア」に関する議論に沿って説明する。続く3節では今回分析対象とした女性団体のミニコミについて概観したのち、4節ではミニコミの記事タイトルの分析結果を示し、先行研究と照らしながら説明を加える。

2 女性とミニコミ

2. 1 ミニコミとは

「個人やグループが、発行する小さな出版物」（丸山尚 1985a : 10）を、日本では総じて「ミニコミ」と表現する。ミニコミとは、「マスコミ」に対して「Mini Communication Media という和製英語の略」語（南陀楼綾繁 1999 : 10）¹である。このミニコミには厳密な条件はなく、例えばページ数や大きさ、刊行頻度、さらには販売しているか広告をとっているか否かなどもその発行者によって異なっている²。丸山は、彼の考える望ましいミニコミの性格について以下5点を挙げている。

一、意見や情報を持っているふつうの人（市民）が、自由にそれを伝えたり交換し合うためのメディア。二、.....利益を追求しないメディア。三、.....多様性にあふれているメディア。四、読者など人とのかかわりにおいては、.....つねに開かれた人間関係を保障しているメディア。五、.....少数者（マイノリティー）の立場からの言論・表現活動を重視する.....異常性の追求ではなく日常の暮らしの中から、社会的課題に取り組むメディア。

（丸山 1997 : 91-2 下線は引用者による）

先の清原の知見にもあったように、ミニコミとは一つの交流の場であることが望ましいとされている。また、マスメディアとの対比として、「マイノリティーの立場」に立脚することが重要とされている。丸山は「問題意識を捨てきれない人々によってようやく世の中に送り出されるのがミニコミであ」

(丸山 1985a) り、「マスコミが社会の反映であるなら、ミニコミは……人々の生き方の表明であり、つながりのためのメディアである」(丸山 1985b: 7) と述べている。

丸山がこのようにミニコミを捉えるのは、ミニコミと社会運動とが密接な関係にあると考えていたためである。ミニコミは「情報や人の意見、運動の中で培った体験などを交流し、共有し合うコミュニケーションのための手段」であった(丸山 1997: 58-9)。例えば「ミニコミ氾らん時代」(丸山 1985a: 80) である 1960 年代から 70 年代は公害反対の住民運動や、ベ平連運動などの市民運動が起きた時期であり、そうした運動と共にミニコミの発展があった(丸山 1985a)。

2. 2 オルタナティブ・メディア

このように、マスメディアとは異なる、マイノリティーの立場を重視したメディアであるミニコミは、オルタナティブ・メディアの一つに位置づけられよう。オルタナティブ・メディアとは、「一般的に大手新聞社やテレビ局などの主流メディアに対する代替的なメディアと理解されている」(藤原広美 2015: 87)。ただ、主流とオルタナティブを明確に区別することは難しく、何を「オルタナティブ」とするのかは「メディア論の専門家の間でも論点となっている」(ウォルツ 2005 [2008]: 14)³。

しかし多くの論者に通ずるのは、それがマイノリティーのためのメディアであるという主張だ。例えば、ウォルツは『『人権』や『ジェンダー』『セクシャリティ』『障害』『宗教』などを理由に社会の隅に追いやられたグループが、自分たちと同じグループに向けたコンテンツを発信している場合が多い」(ウォルツ 2005 [2008]: 55) と、マスメディアから排除された人々によるメディアであると説明している。Fuchs (2010) もまた、オルタナティブ・メディアは抑圧や支配を受けた人々やグループの立場から表現されるものであり、優位な社会に疑問を投げかけるような批判的なメディアであるべきだと主張している。つまりオルタナティブ・メディアとは、情報や経験の共有を目的としたメディアであり、異議申し立てをするうえでも重要な役割を果たすものだといえる。

このような性格をもつオルタナティブ・メディアを分析することは、マスメディア研究とは異なる知見をもたらしてくれる。例えばフェミニズムの領域では、「メディアは『あるべき』『あるはずの』女性像を提示する」ものであり、「メディアが男性によって支配されているとき、メディアの描く女性像は、男から女への要求と期待の表現」（井上輝子 1995 : 2）だと考えられている。つまりマスメディア研究から明らかになるのは、その社会における女性の規範ということだ。

しかしながら、「主流メディアの提供物だけを観察するメディア分析の取り組みは、カウンター・ヘゲモニー的な取り組みの重要性を見落とししたり、少なく見積もるなどの危険を冒している」（ウォルツ 2005 [2008] : 50）。言い換えれば、マスメディアの研究が、社会が女性をどう扱ってきたかを明らかにするのに対して、オルタナティブ・メディアの研究は、女性が何に取り組んできたかを明らかにするということだ。両者とも必要な研究であるにも関わらず、後者への取り組みは十分になされてきたとはいえない。オルタナティブ・メディアとフェミニズムの関係が深いからこそ、後者にもっと目を向けるべきである。

2. 3 フェミニズムとミニコミの関係

フェミニズムの発展にオルタナティブ・メディアは欠かすことのできない存在であった。両者の関係についてはピープマイヤー（2009 [2011]）が詳しく述べている。ピープマイヤーは、「『ガール・ジン』をアメリカ合衆国における 20 世紀末のフェミニズムが展開した場として考察し」（上谷香陽 2013 : 2）、フェミニズムと「ガール・ジン」⁴、つまり「多種多様な非公式の出版物」（ピープマイヤー 2009 [2011] : 72）との結びつきの強さについて説明している。

非公式の出版物の数々スクリップブック、健康についての冊子、謄写版の文書—によって、少女と女性たちはしばしば些細すぎる、個人的すぎる、物議をかもし過ぎるという理由でほかの場所では語られないことを言うことができるようになった。（ピープマイヤー 2009 [2011] : 83）

冒頭で触れたように語りの場として「非公式の出版物」が重要な機能を果たしてきたというのである。70年代の日本においても、「コミュニケーションの媒体として数多くのビラ、リーフレット、機関誌、ニュースレター、およびミニコミ誌などインフォーマルな印刷物」が発行され、これらはリブの「急速な広まりを促し、運動の独自性を社会に印象づけた」（井上ほか2006：135）。このようなことは70年代に限定されるものではない。松浦さと子(1997)は、90年代の女性たちが活動のなかでHPやFAX、ビデオなどを用いた事例を挙げている。様々な媒体のオルタナティブ・メディアが女性たちの活動と共にあった。Atton が、ジンは書き手と読者のあいだにアイデンティティやコミュニティを形成する（Atton 2002：54-5）と述べているとおり、オルタナティブ・メディアは、「女性たちが団結する助けとなった」（ピープマイヤー2009 [2011]：78）のである。

またこれらのミニコミの役割は、彼女たちの組織を維持したり、思想的に同じ方向を向けさせたりすることにあるのではない。例えば清原によれば、草の実会は、個々の会員が「会の内部では多様な意見によって考えを深め、会の外部では特定の行動をする」（清原 2014：110）ように機能したという。草の実会のそうした機能について、清原は投稿者の言葉を借りて「個々人を育てる培養基」（清原 2014：110）と表現している。

女性たちにとってミニコミとは、何かを教えてもらうための教科書ではなく、情報共有や体験の共感、ときに違和感について語り合う場であった。こうした「語り」を通じて、女性たちは「女性差別と闘う主体」（木村 2000：37）を形成していったと考えられる。彼女たちが何について語り合ってきたのかを明らかにすることは、そうした主体形成の過程を知ることにもつながるといえよう。

2. 4 分析資料としてのミニコミ

ミニコミは当時の女性たちだけでなく、後世の人びとにとっても重要な役割を果たしてきた。例えば、多数のリブグループのビラや機関誌の記事を収録した資料集『資料日本ウーマン・リブ史』の発行は、70年代当時を知らない世代がリブの主張に触れることを可能にした。リブ研究はこうした資料集⁵

から多くの情報を得てきたのである⁶。こうした当時の資料は、「単に『歴史的』資料としてあるだけではない……日本の市民社会が現在のような形をとるに至ったいわば『経路』を知るうえでも……重要な意味をもつ」（町村敬志 2012 : 44）。いわばミニコミは、後世の人びとが当時の人びとと語れる場でもあるのだ。「フェミニズムが見えない時代」（菊地夏野 2004 : 34）であるからこそ、「経路」を確認しておくことには意義がある。

本稿では 4 節にてミニコミの記事のタイトルをテキストマイニングし、そこで用いられる語の頻出度から彼女たちの関心の推移を明らかにしようと試みた。だがその前に、テキストマイニングという手法の意義と、今回分析対象としたミニコミの概要について 3 節で詳細を述べておく。

3 テキストマイニングと女性団体のミニコミ詳細

3. 1 テキストマイニングの意義

テキストマイニングとは、端的にいえば、コンピューターを使用して大量のテキストデータから知見を得る手法である（石田基広 2008, 樋口耕一 2014, 左古輝人ほか 2016）。この手法の利点として、左古は次の点を挙げている。

生身の人間が通常の《読む》行為……では読み通すことが不可能な、巨大な自然文コーパス（corpus.資料体）から……コーパスが全体として有する傾向を偏りなく把握したり、特徴的な部分や側面を発見したりするのに資する。（左古ほか 2016 : 66）

そしてこの手法によって得られるのは、「収集したテキストに共通する話題（テーマ）であったり、テキストを書いた人の癖であったりとさまざまである」（石田 2008 : 1）。つまり、テキストマイニングを行うことで、一冊ずつ丹念にミニコミを読み込んで得られるのとは異なる知見を得られるということだ。また左古（2014）は、「ジェンダー」という語をタイトルに用いた刊行物のテキストマイニングを行っているが⁷、その効果の一つとして専門家らの、あまりにも自明すぎるために言語化されないような「常識」を、「明確な言葉で述べることができる」（左古 2014 : 33）点を挙げている。

つまり、本稿がミニコミのテキストマイニングから明らかにしようとしているのは、(1) ミニコミに携わっていた女性たちの共通の話題であり、そしてそれらは(2) 彼女たちにとっての「常識」を発見することにつながるのである。これらはミニコミの外部にいる人間がフェミニズムの「経路」を知ろうと重要な手がかりを与えてもくれるだろう。

3. 2 対象—1950年から2009年にかけて発行されたミニコミについて

今回分析対象としたミニコミは、以下の①～③のミニコミのなかから、(1)から(5)の基準で選出した。今回抽出にこれらのデータベースを用いたのは、女性団体やミニコミの情報を掲載しているデータベースがこれら以外に無いからだ。そうした消極的な理由だけでなく、『女の便利帳』『ミニコミ総目録』共に、団体やミニコミを地域やテーマで限定することなく網羅的に把握することを目的として作られており、情報量の点から見ても優れたデータベースであるからだ⁸。

- ①日本全国の女性団体についてまとめている『女の便利帳』第一巻（1996年発行）巻末にある「刊行物」一覧に掲載されているもの、及び同便利帳三巻（2000年発行）に「本」マークのついているもの⁹、『ミニコミ総目録』の女性問題の欄に掲載されているもの、これらのうち、東京都ウィメンズプラザの図書資料室に所蔵されているもの¹⁰。
- ②「WAN (women's action network) ミニコミ電子図書館」, 「国立女性教育会館リポジトリ」で公開されているもの（2016年10月31日時点）。
- ③団体別に資料集が出されているもの（今回分析に用いた資料集は、『侵略＝差別と闘うアジア婦人会議資料集成』と『リブニュースこの道ひとすじ』。）

- (1) 発行年がわかるもの（1950年から2009年¹¹までに発行されたもの）
- (2) 定期的に刊行されているもの（例えば講演会の記録集や、アンケート集などは除いた）
- (3) 発行団体が行政機関ではないもの
- (4) 新聞の切り抜き集、本の索引集ではないもの（記事を抽出する際にも、

新聞の切り抜きは除いている)。

(5) 紙媒体¹²であり、日本語で書かれているもの

表 3-1 掲載されているミニコミ数と今回確認できたミニコミ数

	掲載数 (上記条件に当てはまるもの)
女の便利帳 1 巻	281 団体 (63 団体)
女の便利帳 3 巻	287 団体 (1 巻と重複しないのは 7 団体)
ミニコミ総目録	67 団体 (22 団体)
WAN ミニコミ電子図書館	64 団体 (53 団体)
国立女性教育会館リポジトリ	46 団体 (46 団体)

上記の条件に合致するものから、それぞれ重複して掲載されているものなどを除くと全部で 127 団体であった (以降、今回分析対象とするミニコミについて 127 誌と表現する)。途中から誌名を変更したものも 1 誌と数えている。この 127 誌から記事のタイトルを抽出した¹³。また今回の調査では、IBM/SPSS 社製ソフト Text Analytics 4.0.1 を使用した。

図 3-1 ミニコミ発行団体数の推移と「最古号」発行数

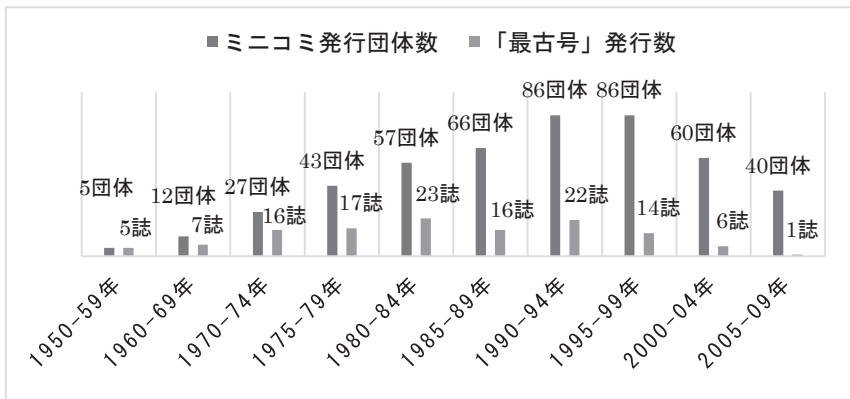


図 3-2 ミニコミ記事数の推移

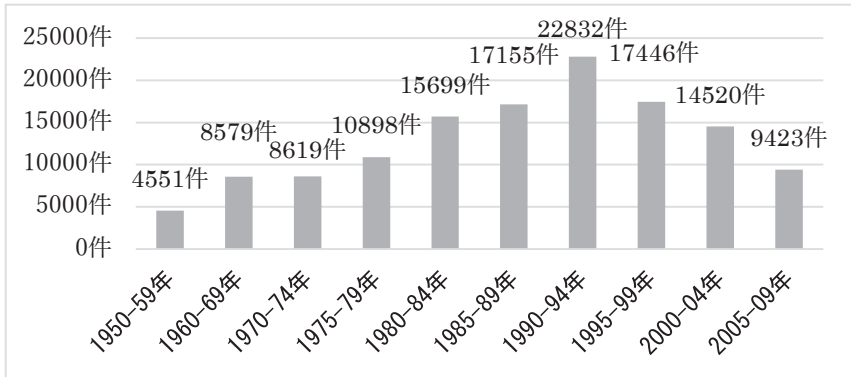


図 3-1 は各年代の発行団体数、「最古号」の発行時期を、図 3-2 は今回対象とした各時期の記事（タイトル）の総数を表している。ここでいう「最古号」とは、今回確認できた最も古い号を指し、創刊号から残っていれば創刊号を、14号から50号まで残っていれば14号を「最古号」としている。

図 3-1、3-2 をみると、90年代にもっとも多く多くの団体がミニコミを発行していたことが分かる。ワープロの登場¹⁴など新しい機器の広まりの影響もあるだろう。しかし、「最古号」の発行年の推移をみると、70年代から90年代にかけて、新しいミニコミが5年ごとに平均して15-20誌発刊されている。このことから70年代から少しずつ増えていったミニコミが、90年代前半にその数のピークを迎えたのだといえるだろう。

続いて、図 3-3 はミニコミそれぞれの発行頻度を表している。隔月は2カ月に1回、季刊は1年に3-4回、不定期は次号発行までに1年以上空いているものや、欠号が多く頻度が確認できなかったものなどが含まれる。今回対象としたミニコミは季刊が最も多く、月刊、隔月の順となっている。また、図 3-4 は1誌が発行されていた年数を表している。今回対象としたミニコミのなかで、最も長い期間発行されていた（現存していた）ものは、1955年から2006年までの52年（1誌）であった。また、127誌中82誌は10年以上発行を続けており、また127誌中33誌は2009年以降も発行を続けている。

図 3-3 発行頻度

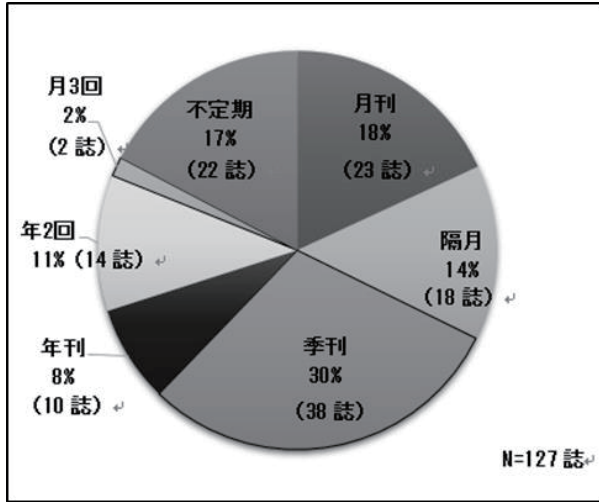
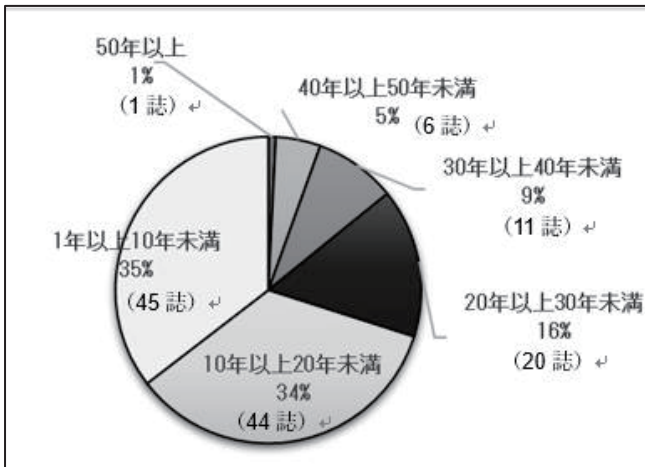


図 3-4 発行年数



最後に簡単にミニコミの構成について述べておく。ほとんどの団体において編集担当がミニコミ発行の指揮を執っている。記事自体は主に会員が書いている。誌面の内容は一様ではないが、団体の活動記録や、イベント等の案

内、他団体や本・映画の紹介、新聞や雑誌の記事の抜粋、読者投稿欄などが中心となっている。中には詩や料理のレシピ、4コマ、イラストや写真を載せているものもある。

以上、今回分析する127誌について簡単に説明した。次節では、抽出したタイトルを年代別にテキストマイニングし、それぞれの時代でどのようなことに関心をもたれてきたのかを概観する。

4 関心の推移

4.1 127誌全体の頻出語句

50年代から60年代まで¹⁵、70年代以降を5年に区切り、それぞれの時期に用いられてきた語（基本的には名詞）を抽出した¹⁶。語の抽出は、一タイトルを一行とし、一行単位で計算している。一タイトル内に同じ語句が何度使われていても、抽出されるのは1つである。（例えば「女性による女性のための運動」というタイトルの場合、「女性」と「運動」が1つずつカウントされる）。抽出した語は、平仮名・カタカナ・漢字・略語は区別せず同義の語としてカウントした。また、「母/母親」「原発/原子力発電所」「保育所/園」「子育て/育児」「フェミニズム/フェミニスト」「買春/売春/買売春」は、同義の語としてカウントした（表記はどちらか一方としている）。

表4-1は頻出率の高い順に35位まで抽出したものである。これを見ると、女性たちの関心が時代ごとでさまざまであることが窺える。しかしそれと同時に、各時代に共通する語も多く、時事的な問題への関心と、常態的に高い関心を持たれているものがあるといえる。1950-2009年までどの時代においても表れるのは、「子ども」「平和」「教育」「労働」「社会」である。

（ただしそれ以外の語については上位35には入らなかった時期があるが、まったく使用されなくなったということでもない）。抽出された語すべてを説明することはできないため、ここでは①呼称についてと、②時代背景を表す語について説明した後、さらに70年代以降に登場する「差別」と「性」という語について詳述する。

表 4-1 全体の頻出語句上位 35 [50-80年代 1~16位]

	1950-1969 (タイトル数 13506)		1970-1974 (タイトル数 8608)		1975-1979 (タイトル数 10861)		1980-1984 (タイトル数 15650)		1985-1989 (タイトル数 17119)	
	抽出語 抽出数	割合 (%)	抽出語 抽出数	割合 (%)	抽出語 抽出数	割合 (%)	抽出語 抽出数	割合 (%)	抽出語 抽出数	割合 (%)
1	婦人	4.7	婦人	4.3	女	6.9	女	5.7	女	5.8
2	母	3.6	女	3.5	女性	3.9	女性	3.9	女性	3.3
3	子ども	3.5	安保	3.0	私	2.8	私	3.3	私	3.2
4	平和	2.7	女性	2.5	婦人	2.4	婦人	2.6	教育	1.9
5	私たち	2.3	教育	2.4	労働	2.2	教育	2.2	子ども	1.8
6	教育	2.0	私	2.3	教育	2.2	子ども	2.1	家族	1.7
7	主婦	2.0	運動	2.0	子ども	2.2	差別	1.7	性	1.5
8	私	1.8	差別	1.8	差別	2.1	平等	1.7	差別	1.3
9	運動	1.7	解放	1.6	解放	1.6	平和	1.6	男	1.3
10	生活	1.5	労働	1.6	男	1.5	労働	1.5	裁判	1.3
11	地方	1.5	闘い	1.5	母	1.3	家庭科	1.1	家庭科	1.2
12	保育所	1.4	母	1.5	主婦	1.3	母	1.1	原発	1.1
13	職場	1.3	沖縄	1.5	安保	1.3	法/法律	1.0	労働	1.0
14	家庭	1.3	子ども	1.4	育児	1.3	性	1.0	平和	0.9
15	女	1.2	裁判	1.1	保育	1.3	戦争	1.0	離婚	0.8
16	母親大会	1.2	中国	1.0	運動	1.2	家庭	1.0	私たち	0.8

表 4-1 全体の頻出語句上位 35 [50-80年代 17~35位]

	1950-1969		1970-1974		1975-1979		1980-1984		1985-1989						
17	反対	159	1.2	保育	90	1.0	性	123	1.1	保育所	149	1.0	運動	128	0.7
18	労働	157	1.2	優生保護	86	1.0	社会	118	1.1	男女	135	0.9	婦人	122	0.7
19	戦争	154	1.1	保育所	85	0.2	平等	112	1.0	男	132	0.8	人権	121	0.7
20	日本	131	1.0	リブ	84	1.0	婦人年	108	1.0	運動	126	0.8	買/売春	114	0.7
21	女性	124	0.9	私たち	82	1.0	私たち	108	1.0	家族	121	0.8	母	112	0.7
22	時事	119	0.9	平和	74	0.9	法/法律	99	0.9	社会	117	0.7	世界	110	0.6
23	中国	110	0.8	社会	74	0.9	制度	97	0.9	私たち	109	0.7	学校	109	0.6
24	安保	108	0.8	歴史	72	0.8	日本	95	0.9	主婦	105	0.7	教師	108	0.6
25	選挙	107	0.8	主婦	71	0.8	裁判	92	0.8	アメリカ	105	0.7	育児	106	0.6
26	先生	101	0.7	環境	69	0.8	家庭	88	0.8	仕事	101	0.6	暮らし	101	0.6
27	政治	99	0.7	アメリカ	65	0.8	男女	83	0.8	制度	99	0.6	社会	100	0.6
28	沖繩	97	0.7	性	64	0.7	政治	82	0.8	離婚	98	0.6	日本	98	0.6
29	社会	95	0.7	デモ	63	0.7	自立	80	0.7	職場	93	0.6	主婦	97	0.6
30	憲法	91	0.7	家族	63	0.7	世界	79	0.7	老い/老後	93	0.6	体	93	0.5
31	アメリカ	88	0.7	日本	57	0.7	保育所	78	0.4	核	92	0.6	家庭	92	0.5
32	世界	88	0.7	旅	54	0.6	平和	78	0.7	優生保護	92	0.6	行動	90	0.5
33	値上げ	82	0.6	育児	53	0.6	アメリカ	76	0.7	保育	91	0.6	職場	90	0.5
34	仕事	80	0.6	男	52	0.6	7ミニズ	72	0.7	買/売春	88	0.6	7ミニズ	86	0.5
35	保育	79	0.6	反対	52	0.6	心	68	0.6	日本	87	0.6	保育	86	0.5

表 4-1 全体の頻出語句上位 35 [90-00年代 1～16位]

	1990-1994 (タイトル数 22690)			1995-1999 (タイトル数 17297)			2000-2004 (タイトル数 14438)			2005-2009 (タイトル数 9386)		
	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)
1	女性	1388	6.1	女性	1501	8.7	女性	1399	9.7	女性	924	9.8
2	女	1012	4.5	私	685	4.0	私	450	3.1	裁判	238	2.5
3	私	835	3.7	女	648	3.7	女	397	2.7	子ども	207	2.2
4	性	366	1.6	子ども	279	1.6	ジーンズ	300	2.1	女	202	2.2
5	子ども	361	1.6	暴力	217	1.3	憲法	260	1.8	労働	186	2.0
6	家族	352	1.6	社会	202	1.2	平和	251	1.7	私	181	1.9
7	男	346	1.5	差別	201	1.2	子ども	251	1.7	ジーンズ	178	1.9
8	教育	320	1.4	性	192	1.1	社会	247	1.7	教育	163	1.7
9	差別	313	1.4	世界	187	1.1	差別	242	1.7	差別	160	1.7
10	社会	306	1.3	教育	185	1.1	裁判	238	1.6	平和	158	1.7
11	裁判	267	1.2	参加	183	1.1	労働	214	1.5	憲法	148	1.6
12	ファミリア	226	1.0	家族	182	1.1	ファミリア	196	1.4	性	146	1.6
13	人権	219	1.0	人権	178	1.0	教育	179	1.2	相談	134	1.4
14	平和	216	1.0	日本	171	1.0	性	179	1.2	支援	123	1.3
15	日本	210	0.9	平和	157	0.9	育児	176	1.2	社会	120	1.3
16	労働	208	0.9	ファミリア	156	0.9	戦争	174	1.2	韓国	115	1.2

表 4-1 全体の頻出語句上位 35 [90-00年代 17~35位]

	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	
17	戦争 195 0.9	沖繩 155 0.9	相談 167 1.2	暴力 114 1.2	17
18	母 171 0.8	男 149 0.9	世界 162 1.1	世界 112 1.2	18
19	あなた 169 0.7	労働 144 0.8	暴力 152 1.1	育児 105 1.1	19
20	育児 169 0.7	北京 140 0.8	あなた 149 1.0	平等 105 1.1	20
21	世界 163 0.7	私たち 139 0.8	議員 142 1.0	健康 104 1.1	21
22	古い/老後 159 0.7	育児 134 0.8	健康 140 1.0	改正 85 0.9	22
23	政治 156 0.7	50年 129 0.7	DV 140 1.0	介護 85 0.9	23
24	私たち 148 0.7	慰安婦 128 0.7	支援 138 1.0	日本 85 0.9	24
25	アメリカ 146 0.6	暮らし 128 0.7	平等 129 0.9	制度 84 0.9	25
26	慰安婦 142 0.6	母 126 0.7	韓国 128 0.9	私たち 83 0.9	26
27	平等 140 0.6	戦後 119 0.7	運動 123 0.9	9条 82 0.9	27
28	体 134 0.6	議員 118 0.7	介護 122 0.8	人権 76 0.8	28
29	セクハラ 133 0.6	介護 118 0.7	家族 121 0.8	ファミリア 75 0.8	29
30	自分 129 0.6	あなた 118 0.7	戸籍 116 0.8	運動 74 0.8	30
31	仕事 119 0.5	セクハラ 116 0.7	男女 111 0.8	法/法律 69 0.7	31
32	暴力 117 0.5	憲法 113 0.7	人権 108 0.7	戦争 67 0.7	32
33	相談 116 0.5	韓国 108 0.6	男 107 0.7	アメリカ 67 0.7	33
34	家庭 114 0.5	裁判 102 0.6	体 105 0.7	均等法 64 0.7	34
35	暮らし 113 0.5	運動 101 0.6	制度 103 0.7	慰安婦 63 0.7	35

4. 1. 1 呼称の変化

当然のことながら、各年代とも、女性を表す語の頻出率が最も高い。しかし注目すべきは時代によって「婦人」、「女」、「女性」というように変化が見られる点だ。第一の変化である「婦人」から「女」への変化については、70年代にリブが、蔑称とされていた「女」という呼称をあえて自身らに引き受けて運動していたことを表していよう。また、リブ以降の一つの特徴であるが「女」と表現方法があり、これもまた「女」の使用の増加につながっていると考えられる。しかし「リブの初期にはまだ使われていた『婦人』の自称が、急速に『おんな(女)』に代わって」いった(鹿野政直 2004: 71)と言われているが、80年代までは「婦人」も高い割合で使用されていたようである。次に第二の変化である「女」から「女性」への変化であるが、それまで「婦人」と表現されてきたものが「女性」へと変わったことに加え、女性に関するイベントや条約(「女性会議」「女性フォーラム」「女性差別撤廃条約」など)の影響が大きいだろう。こうした呼称の変化は単に経年のためではなく、「みづからが属する『男ではないほうの性』をどう表現するかの意識化」(鹿野 2004: 71)によるものであった。

さらに女性を表す語として、「母親」「主婦」という呼称についても、変化が見られる。リブ以降のフェミニズムが、役割に依拠して活動することを拒否したこと¹⁷は知られているが、両語の使用の減少はその表れであろう。両語の頻出率は、60年代までが最も多く、70年代を境に減少している。とりわけ「主婦」の方は90年代には35位以下にまで減少し、00年代には「母親」も35位以下まで減少している。後者の減少の方が緩やかであったのは、活動者自身が母親である場合だけでなく、活動者とその親である母との関係について語られること場合があるからだろう。しかし「母親」「主婦」の語の使用が減少する一方で、「子ども」「育児」、「家庭」や「家族」はどの時代も頻出率が高い。このことから「母親」「主婦」という語が減少したからといって、女性たちが「子ども」や「家庭」への関心を失っていったとはいえない。むしろ、表 4-1 を見る限りでは、「子ども」「家庭」への関心は常に女性たちの関心の中心にあったのである。

4. 1. 2 時代背景を反映する語

頻出語はそれぞれの時代背景をよく表している。例えば 70 年代前半の 18 位と 80 年代前半 32 位とに「優生保護」の語があるが、これは 1972 年から 1974 年にかけてと、1981 年から 1983 年にかけての優生保護法改正をめぐる動きの影響が大きい。また 80 年代前半後半の 11 位に「家庭科」があるが、80 年代は家庭科の男女共修をめぐる活動が最も活発であった時期であるし、80 年代後半の 12 位「原発」は、チェルノブイリ原発事故を受けての記事が多い。ほかにも、各時代に盛り上がりを見せた話題が、使用語の頻出率に表れている。

このようにある時期にのみ高頻度で現れる語もあれば、ある時期から女性たちの関心の中心となったような語もある。70 年代前半の「性」「差別」の語の台頭がその代表であろう。両語の台頭は、「リブは公的な制度としては『平等』が明示されながら、社会的には厳然たる性差別が存在する現代社会」（江原 1985 : 133）を批判したことを反映している。両語とも頻出率の変動はあるにせよ、1970 年代から 2000 年代にかけて高い頻出率を維持しており、1970 年代以降、女性たちの中心的な話題の一つであったといえよう。またほかにも、80 年代後半から「人権」、90 年代前半から「暴力」が登場しているが、これらも第二波フェミニズムを特徴づける語だといえる。例えば、大越愛子は、「いかに女性の人権……性的人権が侵されてきたかの解明が、現在の日本のフェミニズムの主要課題になっている」（大越 1994 : 46）と述べている。また、90 年代には女性の人権を侵害するものとして「女性に対する暴力」が「世界共通の普遍的な問題」として位置づけられた（渡辺和子 1994 : 65）。このように、女性の人権を侵害するものとしての暴力は、今後もしばらくは中心的な課題であり続けるだろう。

4. 1. 3 小括り

以上簡単ではあるが、抽出した語について説明してきた。表 4-1 から、女性たちが何について語ってきたのか、その推移を概観することができた。おそらく個別の語の推移についていえば、既存の研究のなかで論じられてきた話でもある。そして今回の表 4-1 のような形で示したことは、これまでの主

張の数量的な裏付けにもなりうるだろう。また、年代記的な記述からは見えてこない女性の歴史をみることができた。例えば呼称の変化などは、機械的に切り替わるのではなくゆるやかに変化していった様子がみえる。こうした変化は、その語を使用するという実践を通して獲得されてきたのである。どのような語が選択・使用されてきたのか、それは些末なことがらではなく、それ自体一つの実践として捉えるべきものであろう。

4. 2 個別の語と共起

ここまで、女性たちが各時代でどのようなことに関心を持ってきたのかを確認したが、用いられている語が同じであるからといってそれら全てが同じ文脈で用いられたわけではない。例えば「教育」は、学校教育や家庭教育、生涯教育といった異なる用いられ方をする語である。どのような語と共に用いられてきたのかを確認することで、より彼女たちの関心の推移を捉えることが可能になるだろう。ここでは、70年代に登場した「差別」と「性」という語を例に、両語がどのように用いられてきたのかを、詳細にみてみたい。手順としては、「差別」「性」が使用されているタイトルのみを抽出（それぞれ「差別タイトル」「性タイトル」とする）し、それぞれの頻出語（共起する語）を抽出した。ちなみに5-60年代はそれぞれ抽出数が少なかったため（差別タイトル43、性タイトル15）省略した。

4. 2. 1 「差別」

表4-2は「差別」と共起する語の上位20である。80年代以降は「女性差別撤廃条約」に関連する記事が大きな割合を占めている。共起する語から、差別がどこにあるのか、そしてどのような差別があるのか、という問題が浮かび上がってこよう。当然とっていいだろうが、全体を通して「男女」や「性」による差別が、「賃金」「雇用」「労働」「教育」といった場面で起きていることがわかる。

また、「婚外子」や「別姓」、「部落」についても「差別」の問題として取り組んできた。特に長い間取り組まれていたのが、「婚外子」であろう。呼称こそ、70年代は「私生児」、80年代は（表欄外になるが）「非嫡出子」

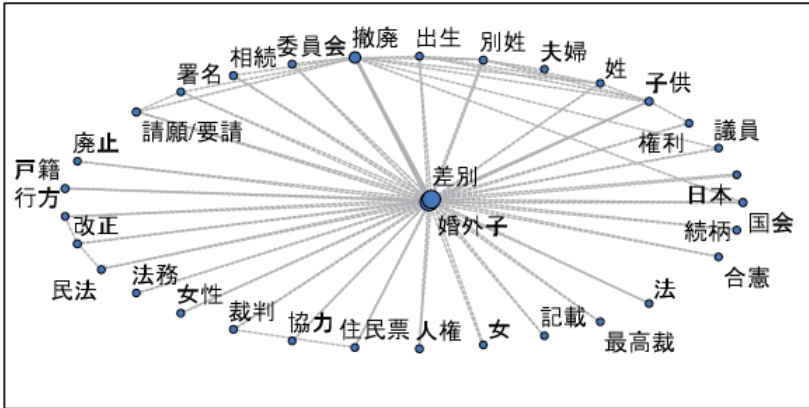
(抽出数8個, 1.6%), 90年代以降は「婚外子」と変わっているが, 出生によって子らが受ける差別について常に高い関心が寄せられていたといえる。

表 4-2 「差別」と共起する語上位 20

	1970年代 (N=392)			1980年代 (N=494)			1990年代 (N=514)			2000年代 (N=402)		
	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)
1	男女	46	11.7	撤廃	116	23.5	撤廃	105	20.4	女性	120	29.9
2	女	46	11.7	条約	93	18.8	性	93	18.1	撤廃	116	28.9
3	女性	43	11.0	性	91	18.4	婚外子	80	15.6	裁判	75	18.7
4	性	41	10.5	女性	69	14.0	女性	76	14.8	男女	72	17.9
5	裁判	29	7.4	男女	53	10.7	男女	43	8.4	条約	56	13.9
6	教育	27	6.9	女	37	7.5	裁判	37	7.2	賃金	54	13.4
7	部落	24	6.1	婦人	36	7.3	条約	30	5.8	婚外子	44	10.9
8	賃金	23	5.9	裁判	30	6.1	女子	28	5.4	間接	29	7.2
9	婦人	20	5.1	批准	28	5.7	賃金	26	5.1	労働	20	5.0
10	解放	18	4.6	教育	24	4.9	女	26	5.1	戸籍	20	5.0
11	労働	17	4.3	平等	19	3.8	相続	24	4.7	性	19	4.7
12	私生児	17	4.3	女子	17	3.4	人権	22	4.3	選択議 定書	18	4.5
13	女子	13	3.3	労働	17	3.4	続柄	19	3.7	国連	17	4.2
14	男	13	3.3	賃金	16	3.2	住民票	18	3.5	日本	17	4.2
15	告発	13	3.3	部落	14	2.8	委員会	17	3.3	平等	15	3.7
16	意識	10	2.6	人権	13	2.6	反対	16	3.1	女子	14	3.5
17	法/法律	10	2.6	抗議	13	2.6	子ども	14	2.7	法	14	3.5
18	社会	10	2.6	子供	11	2.2	国会	14	2.7	判決	13	3.2
19	抗議	10	2.6	委員会	11	2.2	人種	13	2.5	社会	13	3.2
20	子ども	10	2.6	法	11	2.2	検証	12	2.3	人権	13	3.2

さらに、差別タイトルのなかで 70 年代から 00 年代までの「私生児」「非嫡出子」「婚外子」（以後、まとめて「婚外子」とする）を含むタイトルを抽出した。「差別」「婚外子」と共起する語のネットワーク図が、図 4-2 である。線がつながっている語は共起しているという意味である。

図 4-2 「差別」×「婚外子」と共起する語



これら共起する語から、「婚外子」については、「住民票」や「続柄」「相続」などが問題とされていたといえる。また、少々わかりづらいが、「夫婦」「別姓」「出生」「子」が線で結んであることから、別姓夫婦の子が「婚外子」として高い関心が寄せられていたことが推測される。

とりわけ 90 年代に「婚外子」が上昇するのは次のような背景に起因するだろう。1987 年頃から夫婦別姓が問題視され始め、子に関して、「1988 年 5 月、婚姻・非婚を区別しない方法による住民票の交付と精神的苦痛に対する慰謝料を求めて、市を提訴……95 年 3 月 1 日から、住民票における世帯主との続柄は、婚外子・婚内子を問わず、『子』と記載されることとなった」（鹿野 2004 : 130）。

4. 3 「性」

表 4-3 は「性」と共起する語の上位 20 である。

表 4-3 「性」と共起する語上位 20

	1970年代 (N=183)			1980年代 (N=376)			1990年代 (N=373)			2000年代 (N=333)		
	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)	抽出語	抽出数	割合 (%)
1	女	43	23.5	差別	79	21.0	暴力	82	22.0	暴力	74	22.2
2	差別	41	22.4	女	58	15.4	差別	58	15.5	教育	55	16.5
3	教育	25	13.7	教育	48	12.8	女	41	11.0	女性	31	9.3
4	解放	17	9.3	女性	27	7.2	教育	34	9.1	被害	28	8.4
5	女性	15	8.2	生	23	6.1	人権	29	7.8	生	28	8.4
6	論理	13	7.1	人権	22	5.9	女性	24	6.4	子ども	17	5.1
7	政治	10	5.5	男	18	4.8	子ども	20	5.4	体	16	4.8
8	男	9	4.9	子ども	12	3.2	差	16	4.3	差別	15	4.5
9	労働	6	3.3	商品化	10	2.7	生	15	4.0	犯罪	15	4.5
10	侵略	6	3.3	差	9	2.4	慰安婦	14	3.8	戦時	15	4.5
11	愛	5	2.7	嫌がらせ	9	2.4	男性	13	3.5	女	14	4.2
12	安保	5	2.7	撤廃条約	9	2.4	法/法律	13	3.5	差	14	4.2
13	子ども	5	2.7	暴力	9	2.4	体	12	3.2	奴隷	12	3.6
14	学校	4	2.2	買/売春	8	2.1	社会	11	2.9	法/法律	11	3.3
15	商品化	4	2.2	関係	8	2.1	表現	11	2.9	ジェンダー	11	3.3
16	産む	4	2.2	優生保護	8	2.1	自由	10	2.7	現場	11	3.3
17	行動	4	2.2	愛	8	2.1	虐待	9	2.4	愛	10	3.0
18	生	4	2.2	意識	8	2.1	被害	9	2.4	裁判	10	3.0
19	管理	3	1.6	セミナー	6	1.6	人種	9	2.4	搾取	10	3.0
20	搾取	3	1.6	学校	6	1.6	買/売春	8	2.1	男性	10	3.0

ウーマン・リブが、従来語ることがタブーとされてきた「性」に焦点を当て、問題化してきたことは既知の事実であろう。2節でも触れたこれまで語ることができなかった話題の一つが「性」に関連するものであった¹⁸。「差別」

との共起が、どこに、どのような差別があるのか、を表していたとするならば、「性」の方は、どのような文脈で「性」が語られてきたのかを表しているといえよう。例えば、前項で女性の呼称が変化した点を説明したが、「性」との共起では70年代から90年代において「女」が上位を占めている。「婦人」にとって「性」とはタブーのままであったということだろう。

また、「性」と共起する語に、よりネガティブな表現（「いやがらせ」「暴力」「虐待」「被害」など）が多い。これまで女性たちが「性」を語る際には、何らかのトラブルと関連づけて語ってきたということである¹⁹。

特に注目したいのは、「性」と最も共起する語が、「差別」から「暴力」へと移行した点である。90年代以降、女性たちが「性」を論じる際、踏み込んで言えば「性」を問題化する際、重要な役割を果たしたのが「暴力」という概念であったと考えられる。全体の頻出語（表4-1）をみても、90年代以降、「女性に対する暴力」とされる「セクハラ」「DV」「慰安婦」といった語の頻出率も上昇している。「性」と「暴力」の問題は近年の女性たちの中心的な関心であった。一方で、「性」と「差別」の共起の減少は何を意味しているだろうか。これは単に「差別」という語が「暴力」（もしくは別の語）に置き換えられたのだろうか、こうした詳細な変化については、ミニコミの記事の内容に踏み込んで考える必要があるだろう。この点については今後の課題としたい。

以上、4節ではミニコミのタイトルに用いられてきた語を抽出、その頻出率の変遷を明らかにした。ここから、常態的に高い関心を持たれている話題、その時代を反映する話題、ある時期から登場する新しい話題があることがわかった。また、同じ話題であっても異なる語が用いられてきたということも明らかになった。

女性たちの活動は、途切れることなく行われてきた。70年代に提起された「差別」「性」の問題についても、内実の変化はありつつも、近年に至るまで女性たちの中心的な問題であり続けている。4節でみてきた表は、こうした女性たちの活動の蓄積を表している。

繰り返しになるが、今後の課題として、それぞれのテーマについてどのような主張・議論が行われてきたかについては、ミニコミ本文の詳細な分析を

行いたい。また、ミニコミ自体の役割について、特に紙媒体とそれ以外の媒体（SNS 等）の持つ役割といった点についても改めて論じたい。

5 さいごに

本稿ではミニコミを語りの場であるとしたうえで、そこで何が語られてきたのかをテキストマイニングを通じて明らかにしてきた。近年、ミニコミの保存・アーカイブズ化の重要性が主張される²⁰とともに、そうしたミニコミを分析資料として用いることについて検討するような研究もみられる。例えば野口由利子は、「アーカイブズにおけるミニコミ資料利用の展開の可能性」という論文のなかで、従来分析の「補助的資料」として用いられることの高かった「ミニコミ資料自体の分析を試み」ている（野口 2016 : 39）。本稿もそうしたミニコミ研究の一つに位置づけられるだろう。

従来の内容分析が行ってきたように、女性たちがミニコミのなかでどのように語ってきたのかを明らかにすることに加え、何について語ってきたのかにもまた注意を払われるべきである。本研究での知見が、「『これまでの研究や運動は、こういうことを取り上げてこなかったのではないか』と発言しては、上の世代から『やっていたのに...』『リブの時代からずっと議論しているのにどうして知らないの』みたいな反応が返ってくる」（皆川みずゑほか 2009: 18）というやりとりを終わらせる一助となれば幸いである。

注

- 1 南陀楼は、「このような小さなメディアを呼ぶコトバとしては、『ミニコミ』のほか、『同人誌』『自主出版物』……『機関誌』『タウン誌』……『フリーペーパー』などを挙げている（南陀楼 1999 : 10）。
- 2 丸山は、「利潤の追求を目的に発行されるメディアは、ミニコミとは言えない」が、ミニコミの販売、広告を取るという商行為自体は、継続の手段として「積極的に行われるべきだ」と述べている（丸山 1985a:12）。また、情報発信を行う媒体は時代ごとに変化しており、FAX、メール、インターネットの掲示板、近年では SNS を情報発信の主要媒体としている団体も少なくない。
- 3 オルタナティブ・メディアは、媒体も選ばない。特にインターネット上では主流メディアとオルタナティブ・メディアの境界は曖昧なものとなっている（藤原 2015）。また、M ウォルツの著書を訳した神保哲夫は、オルタナティブ・メディアは日本で「市民メディア」と訳されることが多いが、多種多様なオルタ

- ナティブ・メディアを一括りにそう呼ぶのは無理があると解説にて述べている (神保 2008 : 255).
- 4 ジン (Zine) とは自主制作の出版物を指す語であるが、ピープマイヤーは、「ジン」が主に男性によるメディアであったことを指摘し、女性によるジンを「ガール・ジン」と呼ぶ。ちなみに先に引用したウォルツ (2005) が原著内では「zine」と記している箇所を、邦訳では「ミニコミ」や「同人誌」と訳している。
 - 5 他にも、『リブニュース この道ひとすじ—リブ新宿センター資料集成』『行動する女たちの会 資料集成』『侵略=差別と闘うアジア婦人会議資料集成』などがある。
 - 6 「若い世代」がリブに共感を寄せ、リブ再考という流れが生まれた (渋谷晴子 2008) というのも、こうした当時の声が残っていたからこそであろう。
 - 7 同様の研究として D.Haig (2004) がある。Haig は、1945 年から 2001 年までに「sex」「gender」という語がタイトルに用いられている論文数の推移について調査しており、「gender」という語の用いられ方が時代によって変わっていく様を明らかにしている。
 - 8 ちなみに『女の便利帳』1~6 巻以外では『女のネットワーク—女のグループ全国ガイド』(横浜女性フォーラム編 1991) がある。団体の掲載数の多さと、ミニコミ情報の簡潔明瞭さから、本稿では前者のデータベースを用いた。
 - 9 『女の便利帳』は第 6 巻まで発行されており、テーマや地域ごとに女性の活動、会社、病院、弁護士等が紹介されている。掲載団体や情報は巻数ごとに更新されている。第 1 巻においては、ミニコミ一覧のページが設けてあるがそれ以降の巻では見られないため、第 3 巻では本やミニコミを発行している団体であるという「本」マークのついた団体を抽出した。
 - 10 所蔵されている団体資料は寄贈されたものである。
 - 11 2009 年までとしたのは、機械的に 10 年ごとで区切ったものもあるが、SNS の普及 (注 11 参照) に伴う紙媒体のミニコミの減少などが挙げられる。2009 年以降の分析は、SNS という媒体の特性などを踏まえて改めて行いたい。
 - 12 ピープマイヤーは、ジン制作者らが「ジンとは紙のメディアである」として、ブログやメール等の電子メディアとは異なるものと考えている点を強調する (ピープマイヤー 2009 [2011] : 120)。このためこれらを一括りに分析対象とすることは避けた。また、日本におけるインターネット普及率 (70%を超えるのは 2005 年) や、SNS (「mixi」など) の誕生 (2004 年)、スマートフォン発売や「Facebook」「Twitter」のサービス開始 (2008 年) (総務省 2012, 「Digital Arts」) 時期を考えても、今回分析した時代は紙媒体が主流であったと考えられる。
 - 13 目次のあるものは目次通りに、ないものについて筆者の判断 (書き手一人につき 1 タイトル) で抽出した。「編集後記/会計報告/バックナンバー/次号予告」のみのタイトルは省略した。
 - 14 ワープロやコピー機を「一般人が買ったり、利用したりできるようになったのは 80 年代前半ごろである」(南陀楼 1999 : 17)。
 - 15 5-60 年代は記事数、ミニコミ発行団体数が少なかったことから、5-60 年代はまとめて分析を行った。
 - 16 今回の分析では「問題関心の変遷」を知ることを目的としているため、以下の

- ような語句は抽出しなかった。①「資料/特集/連載/報告/参加/案内/紹介/書評/本会議/総会/例会/集会/分科会」②個人名や団体名、都道府県以下の地名。③「目」「手」などの身体を表す語（例えば「私たちの目で見た○○」といった表現で使用される。こうした表現方法については別の機会に改めて考察したい）
- 17 江原由美子はリブとそれ以前の「従来の婦人運動」との違いについて「リブ運動は、母や主婦や女子労働者といった社会的に承認された役割イメージに依拠することを拒否した」と説明している（江原 1985 : 110）。
- 18 「リブ運動は男性中心的な現代への性文化に対して徹底的な批判を行」い「他方、医療の中での女性の性、妊娠、出産、人工妊娠中絶等の扱い方を取り上げた」（江原 1985 : 123）。
- 19 例えば女性の性的欲望や快楽については積極的に議論がなされてこなかったと言われている（斉藤正美 2007, 田中亜以子 2008）。
- 20 例えば『社会と調査』8号では、「データ・アーカイブと二次分析の最前線」という特集を組んでいる。また、小澤かおるはマイノリティーの情報保障という観点から、「少数者に関する書籍や資料」を収集したライブラリ・アーカイブズの必要性を主張している（小澤 2014 : 2）。

参考文献

- Atton, C, 2002, *Alternative media*, London: sage.
- Digital Arts, 2015, 「日本におけるインターネットの歴史」Digital Arts, (2017年6月29日取得, <http://www.daj.jp/20th/history/>) .
- 江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房.
- Fuchs, C, 2010, “Alternative media as critical media” *European Journal of Social Theory* 13(2) : 173-192.
- 藤原広美, 2015, 「デジタル時代のオルタナティブ・メディア研究—2000年以降の欧米先行研究から再考する「オルタナティブ」の概念と定義」『立命館産業社会論集』51(3) : 87-103.
- Haig, D, 2004, The Inexorable Rise of Gender and the Decline of Sex—Social Change in Academic Titles, 1945-2001, *Archives of Sexual Behavior* 33 : 87-96.
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 石田基広, 2008 [2013], 『Rによるテキストマイニング入門』森北出版株式会社.
- 井上輝子, 1995, 「メディアが女性をつくる？女性がメディアをつくる？」井上ほか編『日本のフェミニズム 表現とメディア』岩波書店 : 1-30.

- 井上輝子・長尾洋子・船橋邦子, 2006, 「ウーマンリブの思想と運動——関連資料の基礎的研究」『東西南北』2006 : 134-158.
- 木村涼子, 2000, 「女性の人権と教育——女性問題学習における主体形成と自己表現」『国立婦人教育会館研究紀要』4 : 32-45.
- 菊地夏野, 2004, 「フェミニズムとアカデミズムの不幸な結婚」『女性学』12 : 34-46.
- 清原悠, 2014, 「〈私的な公共圏〉における政治性のパラドックス——女性団体『草の実会』における書く実践を事例に」『ジェンダー研究』16 : 79-114.
- 町村敬志, 2012, 「市民的アクティビズムの組織的基盤を探る——ミニコミ・アーカイブズの効用」『社会と調査』8 : 38-46.
- 松浦さとこ, 1997, 「オルタナティブ・メディアと女性のエンパワーメント」『かながわ女性ジャーナル』15 : 82-97.
- 丸山尚, 1985a, 『「ミニコミ」同時代史』平凡社.
- , 1985b, 『ミニコミ戦後史——ジャーナリズムの原点を求めて』三一書房.
- , 1997, 『ローカル・ネットワークの時代——ミニコミと地域と市民運動』日外アソシエーツ.
- 野口由里子, 2016, 「アーカイブズにおけるミニコミ資料利用の展開の可能性——ミニコミ資料『ブーゲンビリア』の事例分析から」『大原社会問題研究所雑誌』694 : 27-40.
- 南陀楼綾繁, 1999, 「われわれはなぜミニコミをつくるのか？」串間努編『ミニコミ魂』晶文社 : 10-23.
- 皆川みずゑ・藤田嘉代子・大橋由香子・海妻径子, 2009, 「つながる？つなげれない？〈女〉と〈女〉—リブやフェミニズムは何を伝え、現実はどう変わったか？」『インパクション』171 : 19-39.
- 大越愛子, 1994, 「フェミニズム人権論に向けて」渡辺和子編『女性・暴力・人権』学陽書房 : 41-61.
- 小澤かおる, 2014, 「性的少数者のライブラリ・アーカイブはなぜ重要か——LOUDライブラリの場合」『社会学論考』35 : 1-28.

- Piepmeyer, A., 2009, *Girl Zines—Making Media Doing Feminism*, New York University Press. (=2011, 野中モモ訳『ガール・ジン——「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』太田出版.)
- 斉藤正美, 2007, 「ウーマンリブは性について何を主題化しているか」根村直美編『健康とジェンダーⅣ 揺らぐ性・変わる医療——ケアとセクシュアリティを読み直す』明石書店: 125-48.
- 左古輝人, 2014, 「『ジェンダー』とそれを取り巻く語彙の変遷 1980年代-2010年」江原由美子編『ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究』2011-2014年度科学研究費基盤研究C研究成果報告書, 首都大学東京: 17-39.
- 左古輝人・中川薫・須永将史・樋熊亜衣・藤井淳史, 2016, 「福祉サービス評価に用いられる語彙の分析試行——テキストマイニングの適用範囲の探索」『人文学報. 社会学』51: 65-93.
- 千田有紀, 2010, 「小熊英二『1968』リレー書評(3) リブの歴史を描くということ」『ピープルズ・プラン』50: 131-6.
- 渋谷晴子, 2008, 「『第3世代』フェミニストとリブとの距離は何か」『女性学年報』: 45-69.
- 総務省, 2012, 「第2部情報通信の現況と政策動向」『平成24年版情報通信白書』(2017年6月29日取得, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc243120.html>).
- 田中亜以子, 2007, 「ウーマン・リブの「性解放」再考——ベッドの中の対等性獲得に向けて」『女性学年報』28: 97-117.
- 上谷香陽, 2013, 「ガール・ジンからみる第三波フェミニズム——アリソン・ピープマイヤー著『ガール・ジン』を読む」『文教大学国際学部紀要』24: 1-16.
- Waltz, M., 2005, *Alternative and Activist Media*, Edinburgh, University Press.
- , 2005, *Alternative and Activist Media*, Edinburgh, University Press. (=2008, 神保哲夫訳『オルタナティブ・メディア——変革のための市民メディア入門』大月書店.)
- 渡辺和子, 1994, 「世界に広がる女性の人権ネットワーク」渡辺和子編『女性・暴力・人権』学陽書房: 64-79.

横浜女性フォーラム編, 1991, 『新版 女のネットワーキング—女のグループ全国ガイド』学陽書房.

神保哲夫, 2008, 「訳者解説」Waltz. M 著『オルタナティブ・メディア—変革のための市民メディア入門』大月書店: 253-269.

(ひぐま あい・首都大学東京大学院博士後期課程)

What topic did women talk about?
Through text-mining of Women's small-media(=Minikomi)

HIGUMA, Ai

Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University

In this paper, I trace the history of women's topics by text-mining of Minikomi (127 magazines) issued by women's organizations from 1950 to 2009. Small-media (=Minikomi) is one of alternative media, it plays an essential role for the development of feminism. Women have used the "Minikomi" for communication. What topic did women talk about in Minikomi? I extracted the top 30 words used as article title. I noted here (1) change of the name ("fuzin", "onna", "josei"), (2) a word reflected the period ("eugenic protection", "home economics" etc). And I described the words ("discrimination", "sexual", "human rights", and "violence") that newly appeared in different period. Furthermore, I picked up "discrimination" and "sexual" among them, and extracted the top 20 co-occurrence words with both. "Discrimination" co-occurred with words such as "treaty" "male and female" "sexual" "wage" "employment" "child born outside marriage ". Also, "sexual" co-occurred with negative words. And the most co-occurring words changed from "discrimination" to "violence". I argued that the concept of "violence" played an important role in discussing "sexual".

Keywords : alternative media, small-media, text-mining